『今月の天候と農作業』

通巻第5717号
11月号
令和08年11月05日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

2週目は、気温がかなり高くなる可能性があります。

【予報のポイント】

向こう1か月の気温は、期間のはじめは気温が平年並か低いですが、その後は暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。特に、2週目は気温がかなり高くなる可能性があります。

低気圧や前線の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

【確　率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	30	60
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

<1週目の予報> 11月7(土)～11月13日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、高気圧に覆われやすいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

<2週目の予報> 11月14日(土)～11月20日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3週目から4週目の予報> 11月21日(土)～12月4日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報
(https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/)を参照してください。

普通作物

◆大豆

収穫と乾燥

収穫時に大豆の青立ち株や雑草が混ざると茎汁による汚損粒やカメムシ類による被害粒の原因となるため、事前に抜き取りを実施しましょう。

成熟期は、完全に落葉し、莢がカラカラと音がする頃です。コンバインでの収穫適期は、さらに１０日程過ぎて、枝がポキポキ折れる時が目安で、茎水分の高い早朝は避けましょう。

乾燥は、高温ではしわや皮切れを起こすため設定温度を３０℃以下にします。

◆ソバ

収穫と乾燥

バインダーや手刈りでの収穫は、子実の７～８割が黒変した頃の朝夕に行い、１０日程島立てし、子実が粉状になるまで乾燥しましょう。

コンバインでは、８～９割が黒変した頃に行い、乾燥温度は、３０℃以下が目安になります。その後は風選し、粒選別機などで夾雑物を除きましょう。

◆麦類

１　ほ場の準備

排水良好なほ場を選び、砕土は丁寧に行いましょう。麦は酸性土壌に弱いため、石灰質資材で酸度を調整します。堆肥は１０ａあたり１t程度で、基肥は地区基準を参考に施用しましょう。

２　種子消毒と播種

黒穂病、斑葉病対策として種子消毒を行いましょう。播種は、山間部では１１月中旬、沿海部では同下旬から１２月初め頃に行い、ほ場周囲や３～５ｍ間隔に溝を掘るなど、湿害対策を徹底しましょう。

（前畑　祐喜）

施設野菜

◆施設野菜全般

１１月末までは、秋から冬への季節の変わり目で寒暖の差が大きいため、夕方早くに内張ビニルを閉めきって保温すると、ハウス内の湿度が高まり、病害が発生しやすくなります。そのため最低気温を確認しながら、加温機が稼働する程度の温度管理を心掛けましょう。

また、比較的低温で管理する作物は、夜温が下がらない場合、内張ビニルを閉める時間を遅くするなど、状況に応じた管理を行います。

◆きゅうり

促成きゅうりは、主枝から側枝の収穫期となります。一作を通して継続的に安定した収量・品質を確保するためには、草勢を維持しながら、栄養成長と生殖成長のバランスのとれた生育をさせることが大切です。生育や果実の着果状況に応じたかん水、施肥管理を行います。

◆ピーマン

促成ピーマンは、上旬から中旬にかけて収穫量が多くなり、着果負担が増加するため、草勢低下に留意して適期収穫に心掛けましょう。また、草勢維持のために生育や果実の着果状況に応じたかん水、施肥管理を行いながら、収穫が終わった懐枝を順次除去し、通風、採光の改善を図りましょう。

◆トマト

促成栽培は収穫が始まります。果実肥大の促進と草勢維持のため、かん水量や追肥量を調整します。また、極端な草勢低下が見られる場合は、摘果により回復を図ります。

◆いちご

日中に施設内の温度が高く追肥の量が多い場合、チップバーンによるがく枯れが発生しやすくなるため注意しましょう。

また、電照の開始時期となりますが、夕方の日長延長は２時間程度、間欠電照は夕方５時から翌朝６時まで時間あたり５分間、暗期中断は深夜１時間を目途に開始し、その後は新葉の伸びや葉色に応じて時間調節を行いましょう。

（川畑　康憲）

葉茎根菜類・いも類

◆食用かんしょ

収穫・貯蔵の時期です。貯蔵条件は、温度１３℃～１５℃、湿度９０％を目標にします。また、貯蔵中にいもが腐敗する場合があるため、空調設備を積極的に利用すると共に、腐敗した芋は取り除きましょう。

翌年に使用する種いもは、病害が発生していないほ場から採取します。

◆さといも

翌年に使用する種いもは、病害虫の被害が無く、いもの形状が良い、優良な株から選びます。いもを貯蔵する場合は、親いもから子いも・孫いもが離れないようにします。また、収穫せずにほ場で貯蔵する場合は、低温障害を受ける恐れがあるので、マルチを除去し、培土をしましょう。

◆収穫後の片付け（かんしょ、さといも）

病害の蔓延を防止するため、収穫や種いもの採取が終わったら、ほ場の片付けを行います。残渣は、できるだけほ場外に持ち出し、残った残渣は、耕耘等により分解を促します。また、病害の発生源になるため、ほ場や畦畔等に残渣を放棄しないようにします。病害が発生していないほ場や種いも採取ほ場に入る時は、病害虫の伝染を防ぐため、使用する長靴や農機具を洗浄してから入ります。

かんしょでは、茎葉を加害するムツスジアシナガゾウムシの発生が確認されています。

本害虫は、温暖な地域では越冬するため、次作への影響が懸念されます。発生が確認された圃場では、登録農薬を散布するとともに、収穫後は残渣を速やかにすき込み、分解を促進します。また、ほ場周辺のヒルガオ科雑草は除去しましょう。

◆ほうれんそう

加工・業務用向けの露地栽培では、病害虫対策としてべと病やアブラムシ類の防除を行います。

◆たまねぎ

定植時期です。定植の深さは２～３㎝程度とします。また、定植後１週間程度は、かん水し活着を促しましょう。

（倉永泰代）

果樹

１　常緑果樹

◆かんきつ全般

秋肥を施用する時期です。この時期の施肥が、翌年の花芽充実に有効とされています。秋肥の効果を十分に高めるためには、樹体に肥料が吸収される１２℃以上の地温が必要です。これから気温や地温が低下する時期となるため、１１月中旬までに施肥を行いましょう。

◆日向夏の落果防止

日向夏は土壌の乾燥や施肥不足等により、秋から冬の落果が助長されます。落果防止剤を１１～１２月に散布しましょう。

◆完熟きんかん

今年は同一ハウス内での開花時期のばらつきや１～２番花の秋期の落果により、３番果以降の果実が結果の中心となっている園が散見されます。既に果実の肥大が十分な園では、着色に向けて昼温が高くなりすぎないように管理し、肥大が不足している園では、秋季加温を継続しましょう（昼間の温度は２８℃、夜間は外気温のプラス３℃程度を目安とします)。

◆マンゴー

早期出荷作型では花芽分化に向けた管理として、昼間の温度をできるだけ外気温に近い温度に抑え、夜間の最低温度は６～８℃程度を維持します。

十分な低温に遭遇することで、自然に花芽が伸長し始めます。５割程度の出蕾を確認したら、ハウスの夜温を１５℃に向けて徐々に昇温します。急速に温度を上げて花芽を生長させると、花粉や子房の形成不良を引き起こし、結果不良やミニマンゴーの発生を助長します。日中の急激な温度上昇を避けるなどの温度管理を実践し、じっくりと花芽を生長させましょう。

２　果樹園共通

冬期には防風林や防風ネットの整備を行います。防風林は、あまり密植状態にせず、適度に風が通るように枝を整理します。防風ネットは、傷んでいる部分をしっかりと補修しましょう。

（前田　優香子）

花き

◆キク

気温の低下に伴い植物体が結露しやすくなり、白さび病の発生リスクが高まります。曇雨天時は送風などを行い、結露防止に努めましょう。

年末出荷作型は摘蕾期です。花のボリュームを出すために、摘蕾作業は適期に行いましょう。

◆スイートピー

採花開始時期です。

樹勢を安定させ着花を促すため、徐々にかん水を控えるようにしましょう。

また、曇雨天後に晴天が予想される場合は、成長点や葉の焼けを防止するため、カルシウム剤の葉面散布などの対策とあわせ、必要に応じて遮光を行いましょう。

夜間の加温が必要な時期となるため、早めにダクトを設置し、微生物農薬のダクト散布（農薬登録のあるもの）を開始しましょう。

◆デルフィニウム

沿海地域では花穂伸長期から収穫期に入ります。カルシウム資材を葉面散布して茎の硬化を図るとともに、収穫後は適切な前処理を行い、花落ちを防止しましょう。

また、２番花のロゼットを回避するため、１番花の花穂伸長終了時から電照を開始しましょう。

◆トルコギキョウ

過剰施肥や曇雨天はブラスチングの発生要因となるため、追肥は生育状況に応じ、発蕾前に終えるようにしましょう。

一方、１０月定植株は葉先枯れ症状が発生しやすい時期となります。徐々にかん水を控えて根域を広げるとともに、適宜カルシウム剤を施用しましょう。

◆ラナンキュラス

気温及び地温が低下してきます。徐々にかん水間隔を広げて根の伸長を図りましょう。

夜間の加温が必要になるため、早めにダクトを設置し、微生物農薬のダクト散布（農薬登録のあるものを開始しましょう。

（川﨑　真和）

畜産

◆家畜防疫対策

鳥インフルエンザシーズンに突入しました。今年度は１０月２６日現在、国内での陽性事例は確認されていませんが、過去には１０月に発生した事例があり、警戒を高める時期にきています。

また、近隣諸国では口蹄疫を含め様々な家畜伝染病が確認されており、国内への侵入リスクは非常に高い状態となっています。

家畜伝染病から農場を守るため、畜舎内外の消毒や人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策など徹底しましょう。

また、日頃から健康観察をしっかり行い、異常が見られた場合には、速やかに家畜保健衛生所に通報しましょう。

◆家畜

朝晩の気温差が大きくなる時期です。幼畜は特に寒さに弱いため、こまめなカーテンの開閉などにより、畜舎内の温湿度の調整を行いましょう。また、本格的な冬を迎える前に、保温箱や風よけ等の準備、保温機材の点検整備を行いましょう。

牛では、飼料作物の収穫と作付けなど農繁期となるため、観察不足による繁殖成績の低下が懸念されます。朝夕の観察を徹底しましょう。

◆飼料作物

飼料用稲、トウモロコシ（二期作・遅まき）、ソルゴー等の春夏作の収穫と、イタリアンライグラスやえん麦などの秋冬作の作付けが重なる繁忙期です。日々の飼養管理に影響が出ないよう、計画的に作業を進めましょう。

また、粗飼料の生産では十分な収量やＣＰ（粗タンパク質）含量など、質の高い良質な粗飼料を確保することが重要です。県が選定している「奨励品種」を活用するなど、地域の気候や作付け体系、経営状況に合わせた品種の選定を行いましょう。

（長瀬　朋子）

特用作物

茶

Ⅰ　寒害・凍害防止対策

近年は暖冬傾向で茶樹の耐寒性獲得が遅れる傾向にあります。耐寒性の弱い早生品種（さえみどり等）や中切りしたやぶきた等では、秋冬期の急激な低温により茶芽が

凍害を受け、芽つぶれを起こす場合があるため、防霜ファンやスプリンクラーを用いた秋冬期の防霜対策を検討しましょう。

また、幼木園での敷草の全面施用は幹割れが発生しやすくなるため、敷草はできるだけうね間中央に寄せるようにします。万一、幹割れが発生した際は、速やかに株元へ土寄せを行いましょう。

２　害虫の防除

一番茶前のカンザワハダニの密度増加を抑えるためには、整枝・裾刈り後に行う越冬前の防除が重要です。専用ノズルを用いて、飛散防止と散布ムラに注意し、裾葉や葉裏への薬剤付着状況を確認しながら丁寧に散布しましょう。

また、チャトゲコナジラミの発生が多くみられる茶園では、マシン油乳剤によるカンザワハダニとの同時防除を行いましょう。

（新　正仙）

◆しいたけ

１　原木の伐採

原木の伐採は、なるべく晴天が続きそうな時期を選んで実施します。クヌギやコナラの場合、葉が３～７割程度黄色に色づく１１月中旬頃までが、伐採に適しており、樹皮の剥がれにくいほだ木となります。良いほだ木づくりのため、適期伐採を心がけます。

また、伐採後４０～６０日程度は葉枯らし乾燥を実施します。

２　発生操作

ほだ起こし作業は、一般的に１０月～１月に行いますが、品種によって発生する温度帯が異なるため、品種の特性を十分に理解して作業時期を決めます。また、ほだ起こし後に散水を必要とする品種や、水分供給を遮断して抑制を必要とする品種がありますので、使用品種の特性に合った管理を行います。

ほだ起こし作業の際、長時間直射日光に当てるとほだ木が痛むので、作業は曇天の日か朝夕の日差しの弱い時間帯に行うほか、作業時には樹皮を傷つけないよう注意しましょう。

なお、風が強く吹き込むほだ場は乾燥によってしいたけの生育不良や変形を引き起こす原因ともなるため、防風ネット等を設けると良いです。

（荒砂　美月）

農作業安全

令和９年１月からトラクタで道路走行する際には、シートベルト着用が義務化されました。

農作業死亡事故の原因で最も多いものが乗用型トラクタをはじめとした機械の転落や転倒になります。

転落転倒による死亡事故を防止するために、トラクタでの作業時には、シートベルト着用に加えて、安全フレームを立て、ヘルメットを装着しましょう。

（前畑　祐喜）

◆肥料に関する届出義務

堆肥を製造し、他者に譲渡する場合、県へ特殊肥料生産業者届出書を提出することが「肥料の品質の確保等に関する法律」によって義務づけられています。（無償で譲渡する場合も届出が必要です。）

また、生産した堆肥を販売する場合には、肥料販売業務開始届出書の提出も必要です。

堆肥を製造・販売する方は、忘れずに届出を行いましょう。

届出方法等については、県のホームページを御確認ください。

◆農業用資材の高騰対策支援の開始

中東情勢の影響で価格が上昇した農業用資材について、令和８年度「被覆資材等価格高騰対策緊急支援事業」より、価格上昇分の２分の１相当額を支援します。

対象は県内農業者、対象資材は農業ハウス用フィルム、園芸用マルチ、飼料作物のラップ用フィルムなどです。

事業の詳細などは「宮崎県農林水産業ナビひなた MAFiN」を御確認ください。

（農業普及技術課）

内容の詳細について

11 月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp/

向こう１か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜全般	アブラムシ類	**やや多**	アブラムシ類はウイルス病を媒介するので、施設の開口部には防虫ネット等を張って侵入防止に努めましょう。
	ハスモンヨトウ	**やや多**	老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、早期発見と若齢期の防除に努めましょう。施設栽培では施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の飛来を防止しましょう。
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病 褐斑病	並 **やや多** 並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるため、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除しましょう。また、施設内が過湿にならないように換気に努めましょう。
	黄化えそ病(MYSV) ﾐﾅﾐｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ	**やや多** **やや多**	黄化えそ病の感染を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し、完全に枯れるまで密封するなど適切に処分しましょう。
	ﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐ	**やや多**	タバココナジラミの発生が多くなっています。本虫は、キュウリ退緑黄化病を媒介するため、施設開口部へのネット設置により施設内への飛び込みを防止し、増殖しないよう防除を行いましょう。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病 黒枯病	並 並 並	いずれの病害も多発してからでは防除が困難となるため、早期発見・早期防除に努めましょう。発生後は散布間隔を短くするなど徹底した防除を行いましょう。
	ﾐﾅﾐｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ ﾋﾗｽﾞﾊﾅｱｻﾞﾐｳﾏ ﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐ	並 **やや多** **やや多**	いずれの害虫も、有色粘着板を設置して早期発見に努め、低密度のうちに防除を徹底しましょう。また、施設開口部へのネット設置や施設内外の除草などを徹底しましょう。
冬春トマト	葉かび病 すすかび病	並 **やや多**	両病害とも多湿条件下で発生しやすいため、施設内が過湿にならないよう換気に努めましょう。また、多発してからでは防除効果が低くなるため、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除しましょう。
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV) ﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐ	**多** **やや多**	トマト黄化葉巻病は、タバココナジラミによって媒介されるため、有色粘着板等を設置し、媒介虫の早期発見・早期防除を徹底しましょう。また、発病株は伝染源になるため、根ごと抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し適切に処分しましょう。
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病	**やや多** 並	うどんこ病は多発すると防除効果が低くなるため、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除に努めましょう。
	ハダニ類 アブラムシ類	**やや多** 並	いずれの害虫も寄生数が増加してからの防除は困難なため、低密度時に防除を徹底しましょう。株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと効果的です。
果樹全般	ﾁｬﾊﾞﾈｱｵｶﾒﾑｼ ﾂﾔｱｵｶﾒﾑｼ	―	県内５か所に設置している予察灯の直近１か月の誘殺数は、チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシともに平年並～平年より少となっています。今後収穫を迎える園地では、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めましょう。特にハウスキンカンでは、今後のハウス内への飛び込みに注意しましょう。
かんきつ類(露地栽培)	ミカンハダニ	**やや多**	生息密度が高くなってからでは防除効果が低下するため、寄生葉率30%又は１葉当り虫数0.5～1頭を目安に防除しましょう。
茶	カンザワハダニ	**やや多**	本県では冬季でもダニの繁殖が見られるため、越冬前の防除がより重要です。この時期の防除が不十分だと翌年の一番茶への影響が大きくなります。

１）「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

２）病害虫防除肥料検査センターのHPアドレスは、QRコードより閲覧してください。